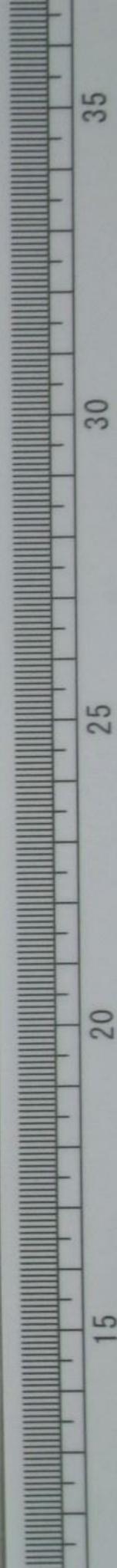


清風瑣言

上

逍遙文庫
文庫 6
66
1



清風瑣言序

夫天地之生品物也。形氣相合。味生其中。而物
之味之淡。莫淡於水焉。淡之於氣也。為清。故物
之性。莫清於水焉。淡能受五味。故淹蔗則甜。梅
則酸。芥薑之辛。茶蓼之苦。無入而不染其味。然
而水性則巨矣。唯茶之於味。以氣為神。其神至
清。故茶能知水。水能知茶。品不高。水失其性。



水性不靈。茶失其氣。故曰茶者水之神。水者茶之體。凡天壤之間。氣味之相合。莫若茶与水焉。然而茶非煎者。不能發其神。余嘗謂茶點者為賢。煎者為聖。何者。茶以氣為神。味抑末也。若點者。則所尚在乎味。其神則餒矣。故水中著鹽。茶中著香料。皆喪其真。水之與茶相得。特以其清身矣。而茶有真香。有純香。有浮香。有間香。水有甘

者。有冽者。有輕者。有重者。譬之猶人性之萬不同。故人之好之。非其性至清。則不得會其真趣。而適之自然矣。若乃涉首陽而采薇。吟楚澤以佩蘭者。窮而顯其清者也。洗身哇駭者。激而鳴其清者也。此二者皆不得其自然。未若彼悅白雲于茅嶺。眺南山乎東籬。或耘耔谷口。或卧遊五嶽。安而樂其清者也。乃至竊吹鍾阜。濫巾方

山者。偽而清其名耳矣。唯其樂者。而後可以會其真趣矣。可以適之自然矣。今之所謂茶人者。大率竊吹濫中之徒。而不揀茶之槩。槍不辨水之陰陽。不問湯之老嫩。柴汝官哥建者之蜜。張成揚茂別紅。方位以螺。蚶。種。雖得之物。竟傾產以供。夸具不亦可咲之甚乎。嗚乎。自以此人。与物氣味相投。猶之茶与水。烏得會其真趣。而

樂其清乎哉。無腸翁浪華人也。博洽彊識於國。書訓詁典故之學。考覈甚精。到且妙於國風詩。然而性取亦峭直。泊然自安。是以世或罕知焉。歲癸丑。來遊京師。寓華頂之麓。与余居。喚呼可相通。是以旦夕款晤乎一堂。頗坐其為人所居。筆研之外。茶具數事而已。蓋其好茶也。因其性之自然。亦猶茶之於水焉。間者。著清風瑣言。使

余題其首。余以為此直游戲之一端。而不足以盡其為人。然而會其真趣。以樂其清者。可以想見。則亦有足以窺其為人者。乃序以論讀茲編者。

寛政六年七月己丑

林亭源之熙撰

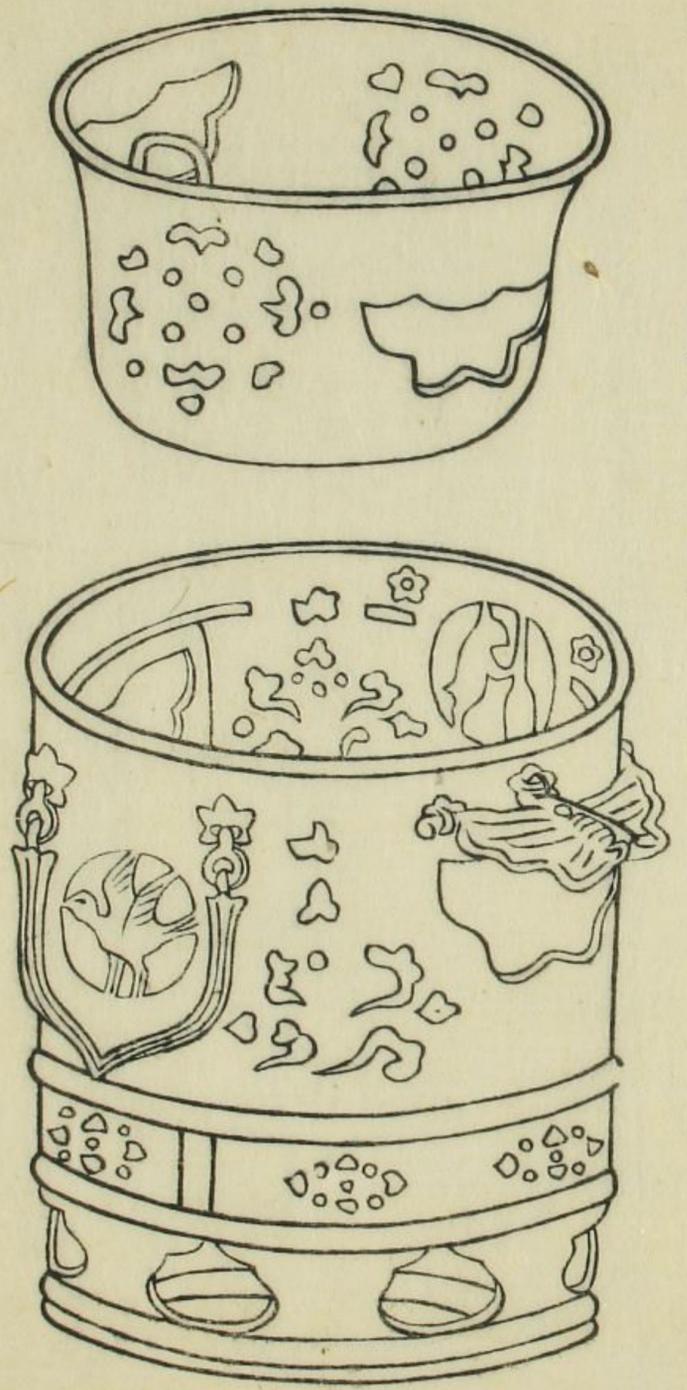


津の玉に花の八重ふきし朝なまの歌さ
多しれまを流るる染の烟よ花の寐まを
と斜さるもれかゝらあま信にまの春乃
木に舟を一つ美て意心表秋のあや
らそ清めまむむはらまの酔くちろ
とまむへともましの人がいふわん歌
ほれ、と花のまへへそ吸まをほ
るなまよふのつて阿ねめら清くそそ

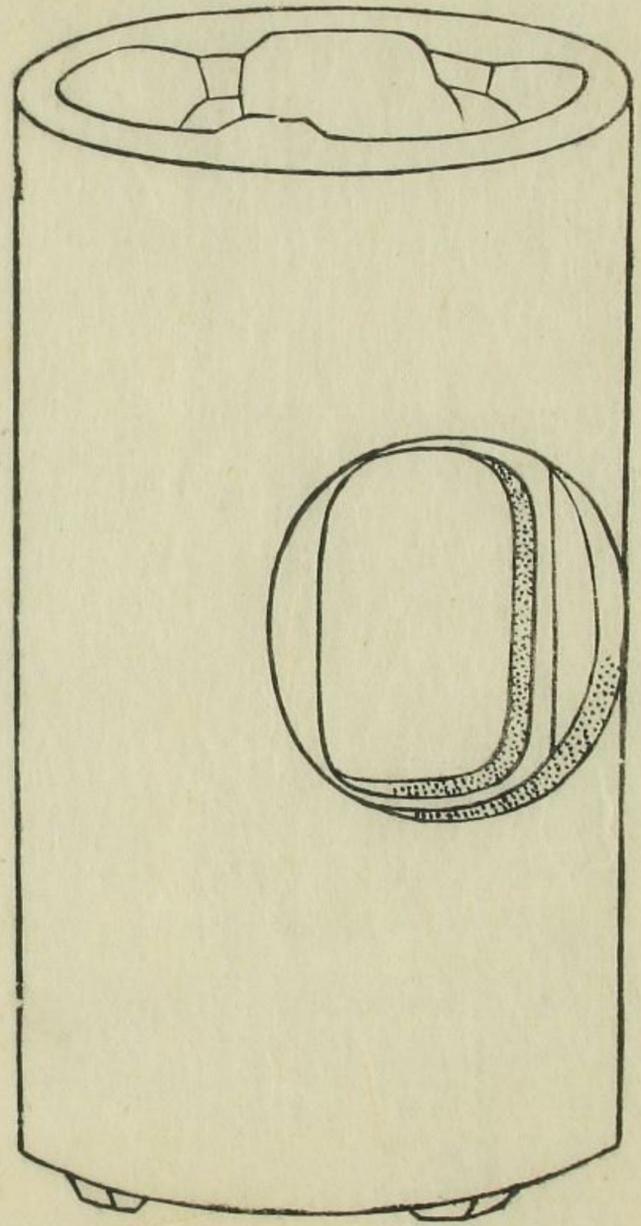
よくともわれをい花友よとほ漢よりを
 起も大を羅まればといへる人茂を
 けりあハ社ハハおのの友に於ては
 喜の木にそよ風の夜にら花よ母この
 小瓶に波を揺りてやの舟お入しらす
 いろ香け字とこハかありし寺ハ社
 むものかた

無
 賜

和州法隆寺所蔵古銅風爐圖

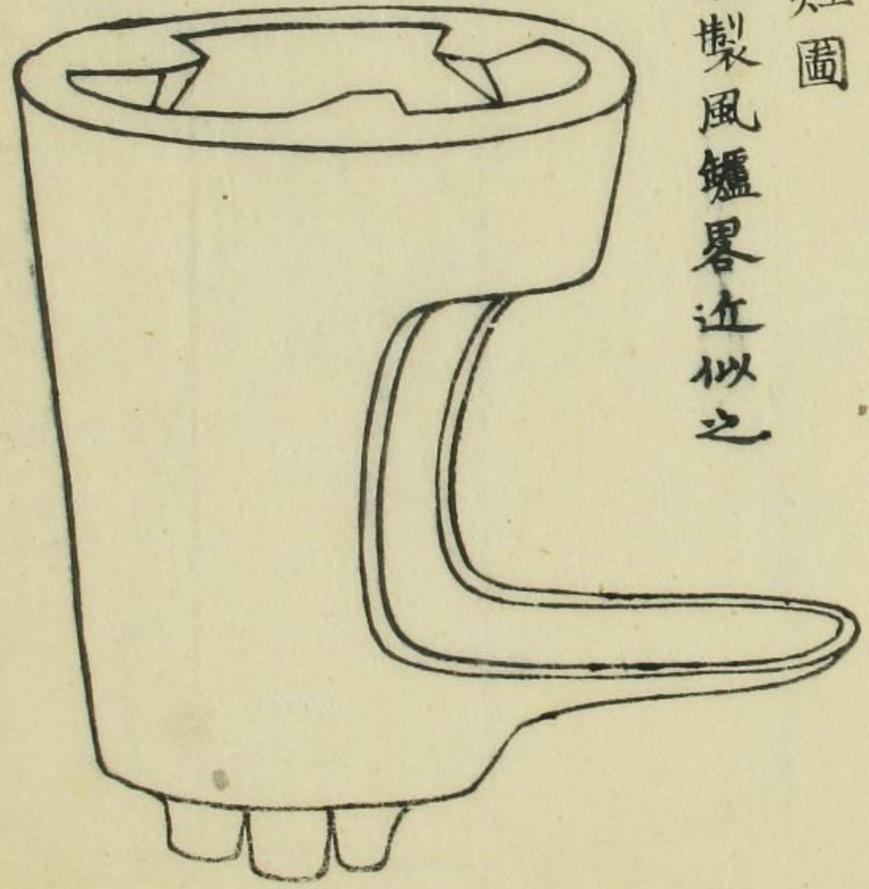


唐製風爐圖 一云涼鑪

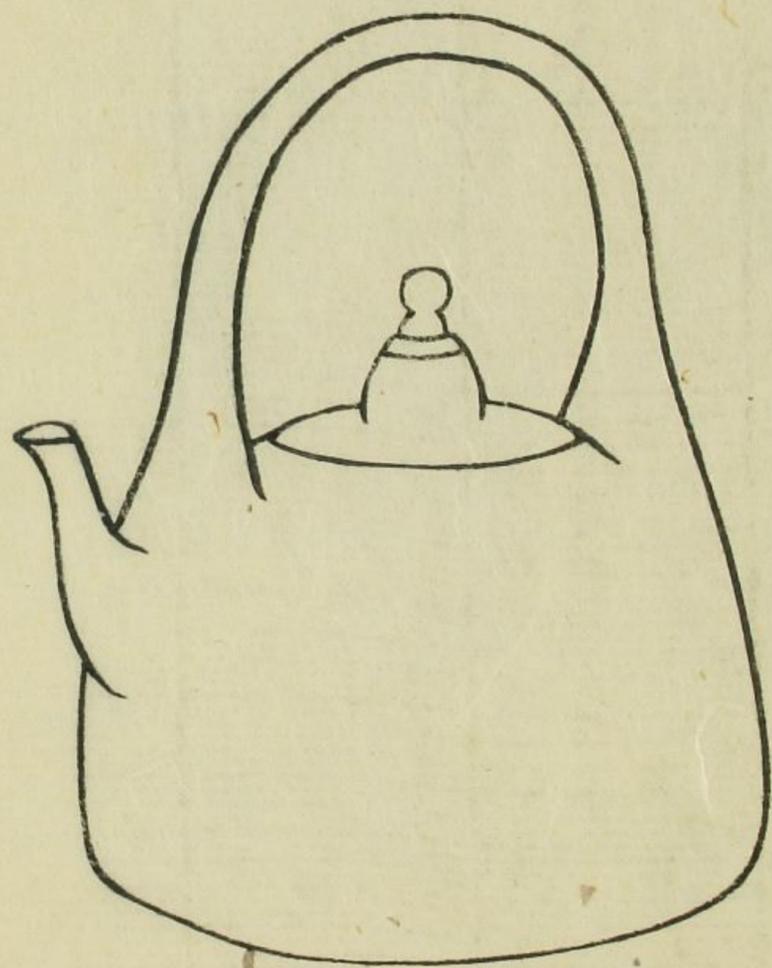


真音彙韻火灶圖

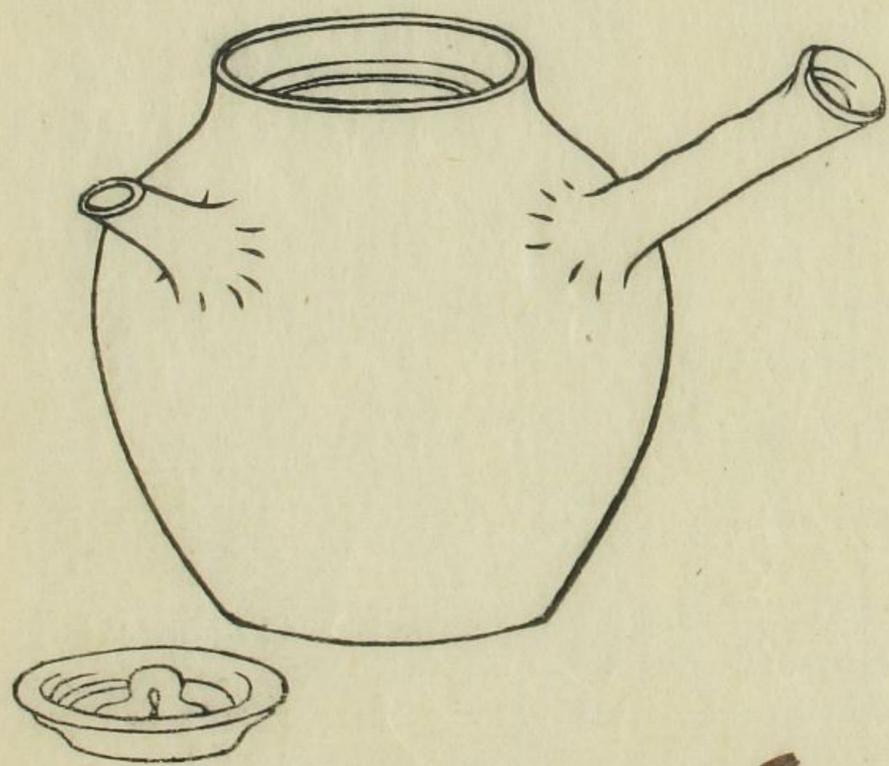
即本邦秋田形製風鑪畧近似之

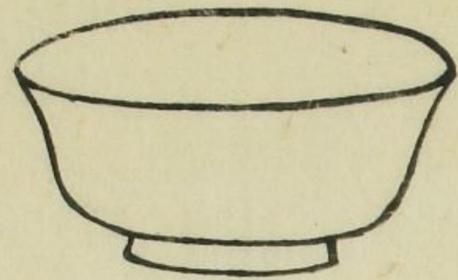


茶壺圖 見真音彙韻

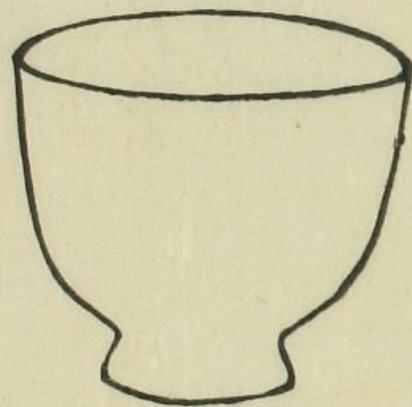


賣茶翁所藏唐製
茶瓶圖
今藏在蕪葭堂

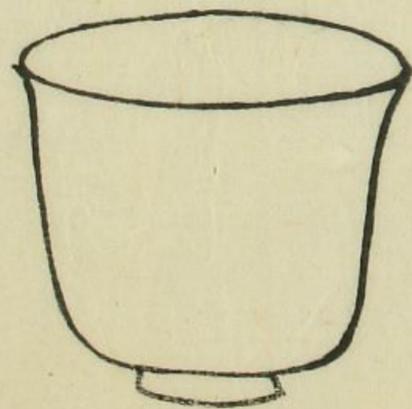




盆



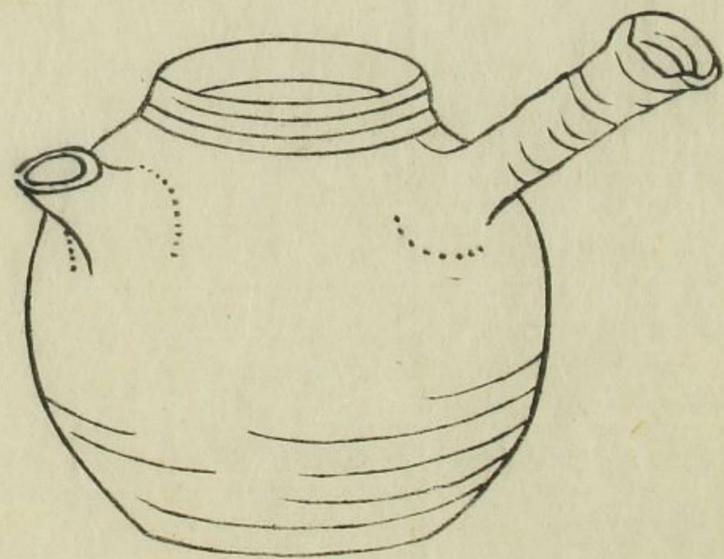
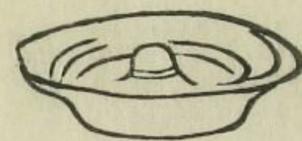
鍾



甌

南蠻製茶瓶圖

鵝居珍玩



海公の帰山を送ねるといふ御書あり。道俗相分強弱
多々秋暗語亦良縁。多茶酌羅日云若若首
傷離望雲烟ころんあし。け海公ハ諸君を知られ
ども。世系ハ景をより天長までの詩賦を乞撫た
すへ。方上ハ即嵯峨家ハ清上なり。け天皇ハ弘仁ハ
公。南の憲宗ハ元和十年よりゆりて。陸羽と云ふり。少
十餘年可もり。其後宇多上皇清高饒れ日。碓礪
天皇仁和寺へ清孝有て。清茶ハ答之あり。と云ふ。

花鳥餘情 若菜のらんをいれど。按ずるに。日本紀略ハ
昌泰二の十月。上皇清高饒交戒せ給。東寺にて也。
元名。同三年正月。天皇朝觀は日若右相を起て陪從
れんぬ。詩賦を乞め給。りんをいれり。野厨無酒。露
谷有菜。茗皇尾之下。遂不云家と云詩。若菜ハ又茶に
アハハ。は日れ清化もや。若すや。又高倉院ハ兼安五
の七月。八月改え。高羽上皇ハ六十の清高ハの議。美
子と康和の例ハ清高ハの下の下に。高茶具と云

攷古

茶字ハ茶也。中唐の頃より一画を省き用ふと曰
 茶録よ出せり。即陸羽上古茶と云者三行有。その中に
 苦茶と云者々々茶也と云り。毛詩云。誰謂茶苦其
 甘如薺。又董茶如飴。かの語ハは者炙茶也とす。ハ
 甘味生ずる所也。尔雅云。檟ハ茶也と云。郭璞云。ほ
 梅小如梔子。冬生。茶不可煮。作羹飲。之呼早取。茶
 晚取。为茗。或曰薺。食物本草蜀人名之。苦茶と云り。
再考曰薺

揚雄方言云。蜀西南人謂茶曰設。云。本草にハ一
 名選。一名游冬と云り。茶録の二種ハ杖冬に地ぬ
 茶。椽の葉よて。今ハ茶と云す。茶字。从艸。从余。上古
 苦茶とも呼て。炙り煮る。食茶也。一説云。古
 其芽不食。故茶字ふと云と云り。是と意飲と云。其
 る。ハ日知録云。本草術義を引て。晉温嶠上表。貢
 茶千斤。茗三百斤。是知自秦人取蜀。而後始有茗
 飲云々。と云。ハ秦は惠王の時を指さる。然と云。漢

上

代ヨハ少フツカに目メを相如楊雄等茶チに名ナありし也。其精
細コなるハハ中チ也。丹丘子蒼山君ラハ服ス之ノ換カ日ハ孫ス才ラと
云イし。漢代モノカタリの語コト也。三國ミクニの時トキ。晉イの輩ヨウ曜ヨウ茶チを好コトみて。
孫皓ソノカウ是コトを茶チ薺シ以テ代テ酒ニ効キひシるル也。由ユ然カハ魏キ晉シ乃ハ
漢ヤより漸ヤ然カをシりテ知ルるル也。晉ワウモウ王ワウ濛モウ人ニ至リて先
茶チを飲ムむ。士シ方フ是コトを苦クや。彼家カのノをシるル也。
水スイ厄ヤクと云イふ也。劉琨リウクン張載チヤイ遠祖エンソ納ナク海安カイアン桓温クワンオン左思サシ
のトモ流リウ茶チ飲キぶ名ナありし語コト書シにスるル也。唐テウのノ玄宗ヘンソウの

天寶中茶仙陸羽

字鴻漸一名疾字季疵號東岡

世セハ出デ肅宗代宗スソウソウの

月ツキ胡コ奴ノ交カりテ茶チ經キヤウ三サン篇ペンを著シ。烹キヤウ煎ウケンのノ法ホウ則ソクを立テ
器キを製シし。其味ミを論ロンぎシ。天下テンカハ人ニ子シ茶チ飲キのノ法ホウ雅ヤに
知ルり。あまアまマくク改カふル也。宋ソウに到リてモ茶チや。丁謂テイブイ茶チ襄シヤウ大
錫シキお出デて。蓋カシ以テ之ヲ也。宋ソウに到リてモ茶チや。丁謂テイブイ茶チ襄シヤウ大
小コ乃ハ就ス固コにテ茶チ出デてハ友トモ固コ私シ固コ大ダイ乃ハ子シ也。弘コウ民ミン乃ハ
推クハク茶チのノ苦ク困クン有ユるル也。茶チのノ美ミ稱ショウ世セのノ文ブン人ニハハあリに
少コトナうル也。換カ骨ボネ香カウ湯トウ茶チ餅ヒヤウ代タイ酒シユ從ジュウ子シ法ホウ風フウ使シ白ハク

然るも人の性天に稟て各自其性也。陽克者ハ常に
清涼を以て善なり。陰勝者ハ温暖を以て補ふ
る。黃岐の活子段也。又常言ハ物ハ腸胃に撲て
其害を及ぶ。禁西の喫茶善生記。茶を飲て一
杯眠らぬも。何れハ身不苦と云ふ。是酒徒の宿疾
といふ也。但唐ハ其母夏ハ代茶飲序ハ。餘滯消
去。一日之初。暫休。瘧氣耗精。終身ハ害斯大
也。又言則。歸功茶力。始患。別不謂茶。災と云ふ也。

ハ。柔哉嫌む人ハ激論を以て。其あま。穀肉良薬也。
度に色生ハ言者好きて。量よる。ハ。俗疾の形也。
損益れ論も。暫くさつて。陳元補の茶略。ハ。茶之
性。於人之有性。人性皆善。茶性皆清。と云ハ。茶
の清雅を中む。語を。茶の性。定に清也。人性ハ
其も。善惡の説。喋々として。言ハ忌む。好む。二
失つと云う。也。

天時

茶之法の劉源長は茶史に茶室の日曝者其堅
多潔然以火炒又云火乾者以氣熱日乾
者以柔心又云日晒必有日茶用青布蓋之可
免ヒナタクサシとんちんヒナタクサシと云。清風の曝乾ヒナタクサシするハ必日茶ありて
下品のと

地靈

茶を宇治の舟郷を家地とし大鳳寺亦幡
は次友園外置。嘉徳の事尤精ぬや小金さ由

池尾田原の村里昔は園家をアサして出さる
宇治を定に清國の建溪ケンケイ小苑ホクエンちり。又其山
骨をヌキ抜てハテン砥ガイ礎スを造り出す。此石它山よ出さず。地
れ土石かきで茶に母乳あり。子テ重チと云と謂へし。

品解

上製ハ不ヒン影タイ少メからむ。初ハジメ後ノチの昔メ祝イひ者シ三サン絶ツツちり。
祖ソ母モ昔メハメの白シロ志シろ昔メ若ニ本ホ茶チ標ヒラ茶チハハらむし。
一の白シロ毛モれ白シロ鷹トウハハ鮮セン於オ初ハジメ齊サイ凡マン凡マンの白シロあるの

まじハ。盆中ハ。漚花の解白を試す用にて。あまの白
色の糸をうすくねじるとなり。いづれも所証なきは。後ぞし
ちり。平く大親糸編子。奇珠の玉。種ちるを舉
ぐる。てんもる。

品目

近江の信樂^{シガラキ}糸不殊多し。山守村^{イモリ}民園^{イノ}を
あまて。蒸^{ゼフ}情^{ハイ}をうす。蒸^{ムシ}情^{ホウジ}の絶不^ツ地^チて下^シ一
ずら。山吹^{ヤマフキ}一^ツ束^ムれ名^ナのみあまのくゆ^クゆ。山吹^{ヤマフキ}ハ本^{ホン}宿^{ヤク}
ね不^フ能^ネちる

ちり^{チリ}の地^チよ
出^デす
美代^{ミヨ}糸^{イト}毛^{モウ}。湖水^{コウスイ}花^{ハナ}橋^{ハシ}
れ種^{タネ}皆^{みな}絶^ツ不^フ也^ヤ。そ解^{トキ}の糸^{イト}多^タくゆ^ユゆる。園^{エン}民^{ミン}湯^ユ
に^ニ類^{ルイ}を^をる^ルもの^{モノ}も^もあ^あり。又^{マタ}糸^{イト}跡^{アト}の^ノ齋^{サイ}戸^ドお^お私^シよ^よ糸^{イト}芽^メ
茂^モ設^{セツ}きて。名^ナと^と物^{モノ}を^を戸^ドく^くに^にた^たお^おも^もる^る。又^{マタ}彼^{カレ}と^と糸^{イト}
合^{カフ}者^セと^と一^{イチ}糸^{イト}を^をる^ルも^も有^アり。沽^カ酒^ウ家^カに^に醇^{ジュン}膏^{コウ}亭^{テイ}
甘^{カン}と^と梅^{バイ}して。戸^ドく^くに^に糸^{イト}題^{タイ}を^を稱^{テイ}する^ルに^に同^{ドウ}じ。又^{マタ}昔^キに
一^{イチ}束^ムハ^ハの^ノ山^{ヤマ}吹^{フキ}して。糸^{イト}第一^{ダイイチ}階^{カイ}を^をす^スむ^ムと^と云^{イハ}り。
大^{ダイ}親^{シン}糸^{イト}造^{ゾウ}り。お^お樂^{ラク}も^もお^お争^{ソウ}り。互^ニお^お利^リ寤^ウ籍^{セキ}を^を踏^{フミ}き

獲ふも茶は美悪。七年茶造り可相向也。茶園
地は名所能増減哉。悟人の茶園者優而
後劣者。負而後者。是亦園地不常也。茶を
るは。はやくは厄を志す。唯く市にお
る人。茶は真に面目にあらず難し。

溪山妙心寺は花園。近江は永源寺の抵。溪土山
の曙。永源寺。莫濃は序。溪寺。割。揚磨の仙。壺。粟
生蓮。山。俗の茶。茶利の爲らるる。は佳。茶。也。それ

を名として。御民の出さる。は不降也。

梅尾高雄の産。昔は上。茶。名。は。権。あり。や。涼。茶。茶
ち。と。う。る。も。者。し。を。と。其。佳。茶。也。と。さ。る。

法園の名産甚多し。伊勢は河上。伊賀は坂部。
大和の茶。生。紀。紀。尾。張。は。内。津。莫。濃。の。茶。
老。後。河。は。茶。久。保。西。は。肥。前。の。茶。上。首
茶。と。う。る。紀。紀。の。産。子。尾。は。紀。紀。の。茶。其。餘。松。川。お
茶。と。う。る。紀。紀。の。産。子。尾。は。紀。紀。の。茶。其。餘。松。川。お
茶。と。う。る。紀。紀。の。産。子。尾。は。紀。紀。の。茶。其。餘。松。川。お

予茶事泥、毒の變る茶家として、燕茶之概を食
了。而耐み立て一里の郊程を帰家は、日中冬下旬
郊外の暖景風尤烈しく、往來の人皆苦吟して
走る。予一人水風を面よ浴きしごと。予は乳室を
思ひ、却て汗を敷く。藤室、蝟尾、海りぬ。
是等々茶仙、此蘇境より考へ、おし、湯を煮
ひて、漏危の癖あり。まじり、害を考へらる。蓋
は、中れ換るべし。又茶録より、茶を煎する者、一人得

新二人は、龍三人は、味七人、是名、龍茶と云ぬ。
をも、ぬり、客を、此法、雅多、飲み、ゆき、衆多に
あゝぬる也。

分量

茶は分量、煮るハ、一合より茶五分を適とす。湯手を
好む者ハ、是に増す。炒茶ハ、量をも不可過。又淹茶ハ
大方、湯を次、煎に、量、杖、増も宜し。但茶、煎了
よらて、活用有る。味、甚、濃、ま、に、色、紅、若

千重方に^{シヤサシ}茶散^{ハウ}方とて^{ツサン}粗茶^ノ素薬^ヲを^{キマ}帛^ニ包^ス。
^{チウタフ}熱湯^ニ漬^{シテ}て^{ツサン}粗茶^ヲ用^キず^ル由^ニ茶^モ亦^チ有^リ宗^ノ此^ノ法^ニ。
^{ツサン}粗茶^ヲ用^キず^ルハ^ハ法^ノ等^ノ一^ニも^モ思^フく^も試^シて^試。
^{ヒキ}粗茶^ヲ先^ニ瓶^ニ投^スて^後に^汲て^清む^ル。
^{スム}志^スく^く泥^ヲを^待て^飲す^茶色^青黄^茶法^ノ味^味。
^ニ甘^クして^又一^種の^趣あり^宗此^ノ法^ニ以^テ茶^ノと^名。
^{テニカイ}して^碾磴^ノの^語れ^るゆ^ニ若^シ此^ノ法^ノの^如き^カ二三^友。
^{ヒツカ}と^宗習^マか^らあ^らる^も有^りり^但臨^テ茶^ノ此^ノ法^ノハ^茶。

焙煎^スる^に意^ニて^ハ味^香甘^味に^茶爲^シ清^味に^茶。
お^そハ^茶種^ノの^臨不^撈す^り煎^種ハ^聖人^也彼^ハ笑^人也。

茗戰

茗^ノ戰^ノ闘^茶れ^推戦^宗此^代の^文人^書に^現づ^り勝^敗。
此^ノ茶^必然^情を^着る^一臨^茶家^ノ茶^ノ法^ノ也^存。
も^法精^ちら^ぬ名^目を^なて^おり^わる^し意^臨茶^ノ。
茶^ノ味^ノ感^精妙^ノを^なる^ハ客^ニに^不其^ノの^敗を^と。

らむ。君子は抱ひよあらるべし。

湯候

湯ハ甘泉清流を擇び法を以て煮るべし。茶は
小老湯三沸法を立其儀始ハ茶瓶茶壺つれ
にても先汲し水を出す。蟹眼魚眼若布お茶
次ハ中間ハ水を過泉ハ涌如く珠を連ぬるに
似終ハ騰波鼓浪こらりて水の性消是茶を
煮るべき是をるべし。湯の性却て純く茶類

ふ無茶譜ハ其音を聴て候ふべし。初振驟の
三音をて。茶聲にりり茶を煮るべし。
蘇唐ハ十六湯不に。湯若茶之司命也。湯澄り
ちんた。上品の茶も凡種とならるべし。

清風瑣言上

早稲田大学図書館

011488576889